

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

1. 教育学部・教育学研究科

研究 1-1

教育学部・教育学研究科

I	研究水準		研究 1-2
II	質の向上度		研究 1-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究活動の実施状況については、平成 19 年度で、著書の発刊が 38 件、論文数が 149 件、合計 187 件（専任教員一名当たり 1.47 件）である。加えて口頭発表が 208 件、展覧会等が 80 件ある。研究成果の社会的還元も、宮城県教育委員会・仙台市教育委員会と連携して進める研究・実践的事業が 45 件ある。研究資金の獲得状況については、平成 16 年度から平成 19 年度まで、科学研究費補助金の申請件数が漸増するとともに採択件数も増加している。とりわけ平成 19 年度（新規採択分）の採択数は、39 件（教員一名当たりの採択件数 0.31）と多い。競争的外部資金の受入状況も平成 16 年度の 681 万円に対して、平成 17 年度以降は 4,036 万円から 7,421 万円と高い伸び率となっている。寄附金の受入れ状況は平成 17 年度以降において平均 11 件、約 1,000 万円で推移し（平成 16 年度 5 件、761 万円）大幅に増加していることは、優れた成果である。

以上の点について、教育学部・教育学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、教育学部・教育学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究成果の状況」について、教育学部・教育学研究科において、教育・心理、特別支

援教育をはじめ、人文・社会、自然さらに保健・体育、芸術の各分野で相応の優れた成果を上げている。学術面では、卓越した研究として、創作活動に基づく業績（作曲）で国際的評価の高い「The Trees:Echoes from the Past（雅楽器のための「木々の記憶」）」が、優れた研究として「飢饉と救済の社会史」がある。社会、経済、文化面では、「青年海外協力隊活動データベース」「学校教育での利用を目的とした宮教大インターネット天文台の活用』『音をかたちへーベトナム少数民族の芸能調査とその記録化』『わかったつもりー読解力がつかない本当の原因』『A New Method for Teachers and Students to Record Daily Progress in a Class』『聴覚障害学生支援 教職員のための手引き』『特別支援教育への招待』などの優れた研究があることなど、相応な成果である。

以上の点について、教育学部・教育学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、教育学部・教育学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「相応に改善、向上している」と判断された事例が 1 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。

